ＮＰＯ救命おかやま 会報

Vol. 36　　2022. 1. 15 発行

1. ご挨拶

岡山県消防長会長（岡山市消防局長）　藤原誠（NPO 救命おかやま役職顧問）

NPO 救命おかやまの皆さま方におかれましては、平素より消防行政につきましてご理解をいただき、深く感謝申し上げます。また、猛威を奮っている新型コロナウイルス感染症に対する様々な困難に対して、数々の局面でご協力をいただいており、この場をお借りし、改めて御礼申し上げます。

さて、消防におきましては、感染対策を行いながら、全力で災害対応や救急活動等を行っているところでございます。各種業界におかれましても、コロナによって活動のスタイルを変えざるを得なくなっていることと思いますが、消防（救急）活動においても大きく変化しております。そこで救急活動の変化について少しご紹介させていただきたいと思います。

まず、救急需要についてですが、これまで、全国的に高齢化による要請件数の増加が課題となり、予防救急などの施策により、救急需要の増加抑制に取り組んでまいりました。このコロナの影響で、その取組以上に大きく需要が減少に転じ、ここまで救急件数が減少したのは、過去に類を見ない状況にまで至りました。県内も同様で、令和２年の救急件数は前年と比較し約１割も減少しています。

次に活動に目を向けると、本来、救急隊は新型コロナウイルス感染症を疑った場合には、直ちに保健所へ引き継ぎ対応をお願いするところです。しかしながら、感染者急増により救急隊が直接病院選定を行わなければならない状況も全国的には多く見受けられ、関係機関との連携が重要であることを再認識させられた次第です。

救急隊は、医療関係者の皆様と同様に目に見えない相手と対峙することから、救急隊が感染媒体とならないようにする必要があります。このことから感染に対する組織体制を見直し、活動時の装備を強化、教育を充実させ、日々の動向を把握するなど、数多くの対応の変化を余儀なくされました。

報道でも多く取り上げられていましたが、「救急搬送困難事案」といったキーワードを耳にする機会があったと思います。これは、救急受入に対し照会回数４回以上かつ現場滞在時間が３０分を要する救急活動事案のことで、県内各地でも感染者の増加に伴い対応に追われたところです。

全国的に見ると、救急隊の現場滞在時間が４０時間を超えるような深刻な搬送困難事案が発生した地域もありましたが、幸いなことに、県内の救急搬送困難事案は、そこまで深刻化はしませんでした。しかしながら、このような救急搬送困難事案に対しましても、岡山県や医療機関と連携して、適切な搬送体制が構築されました。

「凡事徹底」といった言葉がございますが、まさに、このコロナ禍では、日々の当たり前に感染防止を行うといったことが、早期終息に繋がるものと期待します。

ポストコロナ時代を見据えたニューノーマルが問われている今、市民及び職員に対する講習会や各種セミナーの開催が通常通りできない中で、講習の在り方を考える機会となり、全国的に感染対策を徹底した上での現地開催やオンライン開催などが実施されております。消防においても、市民の皆さまに受講していただく救命講習には工夫を凝らしながら実施しているところでございます。

この救命講習の重要性は、バイスタンダーによる処置の有効性が社会復帰率の向上に寄与することからも明らかであり、バイスタンダーの方が勇気と自信を持って「救命のリレー」の第一走者となっていただく必要があります。そのためには、救命講習の参加を促すことはもとより、応急手当実施時のバイスタンダーの不安に対するフォローも重要と考えております。心肺停止の患者対応者のみならず、血液曝露等の不安がある方も対象とするなどの工夫の広がりも見られており、今後も多くの方に不安を取り除いていただけるよう支援するとともに、応急手当の普及に取り組んでまいります。

この新型コロナウイルス感染症の難局を乗り越え、「安全で安心なまち」の実現に向け、ご支援とご協力を仰ぎつつ、今後ともNPO 救命おかやまのご活躍を心よりお祈り申し上げます。

2. ご報告

◆第 16 回総会・2021 講演会のご報告

（2021 年７月 10 日　於：岡山国際交流センターイベントホール　＆　Zoom）

■ 第 16 回定時総会

理事長：氏家良人（函館市病院局長）

“NPO 救命おかやま”は 2021 年6月より 16 年目を迎えました。2021 年７月 10 日(土)に岡山国際交流センター　イベントホール会場とリモート（Zoom）のハイブリットにより、第 16 回定時総会を開催致しました。議長に理事長氏家が任命され総会議事を進めました。

議題は報告事項として、1)2020 年度会員動向、2)2020 年度事業報告について説明がなされ、審議事項として 1)2020 年度収支決算、2）2021 年度事業計画、3)2021 年度収支予算案、4）役員再任などがあげられ、それぞれ協議がなされました。会計はコロナ禍で講習会開催減少による収入減少はありましたが、補助金制度の活用などで補填され、監事からもきびしい状況下で収支維持されていることが述べられ承認されました。

また、役員も全員再任され、理事長に氏家理事、副理事長に津島理事・石井理事の両名が再任されました。

■ 2021 講演会

理事：羽井佐　実（川崎医科大学総合医療センター）

◇講演：『患者安全への僕の夢物語』
松本尚浩　（NexWel 恵那地域笑顔共創クリニック 院長・全日本患者安全組織文化学習支援財団　代表理事）

2021 年の講演会は松本尚浩先生に Zoom でご講演いただきました。コロナ禍のため２年がかりでのお願いとなりました。松本先生は、2017 年の ICLS 指導者養成ワークショップ（岡山協立病院）以来何度か来岡され、心肺蘇生術インストラクションにとどまらず患者安全のための現場実践改善に必要な考え方をともに考える機会を提供してこられました。本講演でも「支援の本質とは支援不要なほどに自立させること」として、行動変容を支えることの重要性を説き、NPO 救命おかやまの今後について考える上で大切な示唆を与えていただいたと思います。会場と Zoom の参加者は県内外で 60 名を超え、氏家理事長をはじめ活発な質問やコメントもあり、盛況のうちに初のハイブリッド講演会を終えることができました。Zoom 開催に尽力いただいた堀先生他事務局の皆様に感謝いたします。

【総会】

【講演会】

【表彰】

■ 2021 年会員表彰（2021 総会後に表彰）

理事・表彰担当：山本英一（平井耳･鼻･のどクリニック）

【2020 年度表彰】

コロナ禍のため、救命おかやまの活動は、大半がストップしてしまい、例年ならば、新人賞でフレッシュな仲間の紹介や、貢献賞の個人や団体の表彰が出来るのですが、該当者すら推薦できない状況が続いていました。こういった状況でも、活動し成果を出している方は・・・と考え、お二人の方を推薦し、理事会などで表彰該当者として承認されました。

1）【NPO 救命おかやま理事長賞】　石井史子先生

先生は、永年、思いがけず救命に係わることになった市民への、心のケアの大切さを訴えられていました。日本臨床救急医学会の蘇生ガイドライン 2020 検討委員会の中に、バイスタンダーサポート検討小委員会があり、委員長として、「バイスタンダーとして活動した市民の心的ストレス反応をサポートする体制構築に係る提言２０２０」をまとめられました。

2）【NPO 救命おかやまグッドサポート賞】　小椋祥一様　（株）あさひ合同会計

皆様はご存じないかも知れませんが、NPO の税務面のサポートをしていただいている方です。ICLS 講習や一般向けの救命講習などが開催できず、NPO を継続させる収入の落ち込みは激しいものになりましたが、持続化給付金、家賃支援給付金の申請、確保、さらに新型コロナ特例の休業支援金・給付金支援や、岡山県や市からの支援金など、該当しそうなものを調べ挙げて、交付に至る手続きを速やかにしていただきました。財政上のピンチでしたが、一呼吸置くことができ、今後の活動の在り方を考える時間が取れました。お仕事とはいえ、グッドサポートです。今まで、顔を見ることのなかった方でしたが、会場まで足を運んでいただきました。今後とも，宜しくお願い致します。

3. 特別寄稿

「応急手当普及活動とバイスタンダーのサポートは車の両輪である」　NPO 救命おかやま副理事長 石井史子

今回私が長年関わって来たバイスタンダーサポートの取り組みに対して思いがけず理事長賞を頂きました。氏家先生はじめ会員の皆様さらに岡山市消防はじめ委員会に関わって下さった皆様にも心から感謝致します。また会報に発表する機会を頂いてありがとうございます。

私は救急医療に関わる中で、自分や患者や家族などのメンタルサポートの必要性を感じてきた。そして市民へ応急手当普及活動を行う中でバイスタンダーのサポートは不可欠だと考えるようになった。そんな時私にとって衝撃的なバイスタンダーの事例（航空機内での心肺蘇生の実施により心的外傷を負った１例：宇宙航空環境医学 44(3),71-82,2007）を知り、

何か自分にできる事がないかサポートの取り組みを考え始めた。応急手当普及活動を行うにはその重要性を伝えるだけでなく、救助者の安全を保障することが必要なはずであるが、その後に起こりうる心的ストレスに対する認識はあまりなく、その事への配慮は殆どなされて来なかった現実がある。岡山市消防局とのサポートの取り組みから始まり、日本臨床救急医学会の委員会から「バイスタンダーとして活動した市民の心的ストレス反応をサポートする体制構築に係る提言２０２０」を発表するまでの経過を紹介する。

航空機内で心肺蘇生を行ったバイスタンダーを A 氏とする。A 氏とはメールや電話で交流があり、善意で行ったバイスタンダーが今後 A 氏のようにならないために何ができるか考えてみたが具体的にどうすればいいかいいアイデアがなかなか見つからなかった。そんな時にたまたま某消防本部が感謝カードを配っているという事を知り、岡山市消防局に協力を依頼する事にした。岡山市消防局の当時の救急担当者に A 氏の事例を紹介し、「応急手当普及活動を行う以上、同時にバイスタンダーのサポートを行う必要がある事」を理解してもらった。同時進行で岡山赤十字病院内にバックアップとしての委員会であるグリーフケアチームを立ち上げた。

平成 23 年 1 月 1 日から岡山市消防局との活動を開始した。内容としては、岡山市消防局が「応急手当を行ってくださった方へ」というお礼と消防の連絡先を書いた連絡票を CPA のバイスタンダーに渡し、消防へ連絡があって消防では対応困難と判断した場合のバックアップをグリーフケアチームが行う事にした。現行の連絡カード（いわゆる感謝カード）を示す。平成 25 年 1 月 1 日からは岡山市消防局に加えて岡山県南東部の 4 消防本部でも同様の取り組みを拡大した。また岡山市消防局では平成 25 年から応急手当普及リーフレットにも相談窓口を掲載しており、そのリーフレットはホームページでも見ることができる。

平成 25 年 5 月に岡山県下で現場活動を行う 14 消防本部全ての救急救命士にバイスタンダーサポートの意識調査アンケートを行った。このアンケート結果から、心的ストレスを受けるバイスタンダーは存在しており、取り組みをしていない消防本部の 8 割以上が必要性を認識している、更に取り組みを開始することで見えてくる問題や実情がある事がわかった。取り組みを行っている県南東部 5 消防本部と取り組みのない 9 消防本部の比較では、取り組みの問題点と取り組む際の不安要素を尋ねた。取り組む前は相談を受ける場合の不安が大きな割合を占めるが、取り組みを始めると配布の際に時間が取れないことが大きな問題になっていて相談を受ける場合の不安は小さくなっている。

次に取り組みを開始している 5 消防本部を対象にした「連絡カードの配布に際して、工夫していること、気を付けていることがありますか」との問いに、岡山市消防局と他の４消防本部を比較した結果では、岡山市消防局の 49%が気を付けていることがある、としているが、その他の４消防本部では、19%に留まっている。では、どのようなことに気を付け工夫しているかというと、ここでも取り組みの長短で意識の差が見られる。岡山市消防局では、「気持ち」「感謝」「心情」「説明」等の言葉が多くを占め、バイスタンダーや関係者に気を配っていることがみて取れるが、４消防本部ではそれらの言葉は少なく「支援隊の活用」が多くを占め、一部に「説明」という言葉も見られている。

ローカルな活動では限界があるため、平成 26 年から日本臨床救急医学会バイスタンダーサポート検討特別委員会として活動を開始した。平成 27 年 8 月には「バイスタンダーとして活動した市民の心的ストレス反応をサポートする体制構築に係る提案」を HP に公開した。この提案が「JRC 蘇生ガイドライン 2015」に引用され、その結果として「救急蘇生法の指針 2015」などの蘇生に関わる各種テキストにも引用された。

その後委員会の再編により蘇生ガイドライン 2020 検討委員会バイスタンダーサポート検討小委員会に名称変更となったが、2020 年末に「バイスタンダーとして活動した市民の心的ストレス反応をサポートする体制構築に係る提言 2020」を公開した。この提言は「JRC 蘇生ガイドライン 2020」にも引用されている。

最後に岡山市消防局の感謝カードと提言部分を示す。

本委員会からの提言1

- 全ての応急手当実施者（バイスタンダー）は身体的・精神的・社会的に保護される必要がある。
- 応急手当実施者が保護されることは、応急手当実施における障壁の軽減につながり、救える命を救うことにつながっていく。
- 市民にとって応急手当に関わることは非日常の体験であり、多かれ少なかれ心的ストレスが生じ、何らかの影響が起こりうる。そのほとんどは問題なく時間とともに軽減するが、特別な対応が必要な人も存在する。このことを社会の共通認識にし、社会全体でサポートする必要がある。

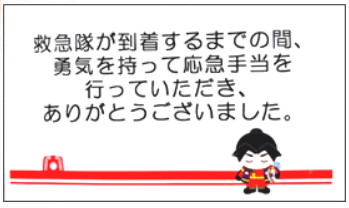
本委員会からの提言2

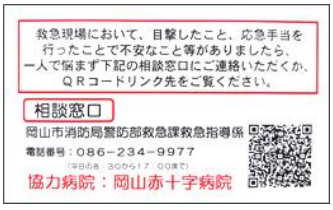
- 消防・医療機関・行政・保健所など地域社会全体で、下記のようなバイスタンダーサポート体制を構築する
  - 応急手当講習会、学校や自動車学校での救命教育では、応急手当実施時に心的ストレスが発生することを伝える
  - 口頭指導時における心的ストレスに対する配慮
  - 応急手当時の感謝カード配付
  - 地域毎のサポート窓口の設置（消防本部、保健所、医療機関など）とともにサポート体制があることを周知する
  - バイスタンダー保険の導入
  - ストレスチェックリストの活用
  - 県や地域のMCが主導することも必要

本委員会からの提言3

- 中学校・高等学校での心肺蘇生や応急手当といった救命教育の普及など、市民が応急手当を行う事が当たり前の土壌づくりを推進していく必要がある。
- 社会でサポート体制を構築することに加え、法的にも保護できるような法制の検討が必要である。民法第698条「緊急事務管理」、刑法第37条「緊急避難」で免責できるという考えもあるが、諸外国における「善きサマリア人の法」のような応急手当実施者を守るための法整備の検討が望まれる。

岡山市消防局





☞ バイスタンダーの活動に関連して、津山からすばらしいお知らせが届きました。

「バイスタンダーの活躍２症例」

津山圏域消防組合　尾原　守（NPO 救命おかやま正会員）

【1 例目】

活躍されたのは動画クリエイター「高村企画」を自営されている高村さん。「作州に AED を広める会」の講習会を早くに受講され、そのままスタッフとして立ち上げから協力してくれているメンバーの一人です。仕事柄講習会の音響全般、会場設営を引き受けてくれて、その場所に合わせた音響機材を持ってきて会場設営をしてくれています。そんな彼は数年前にも意識消失した人に救急車を呼んで助けてあげることがあったそうです。

今回は 2021 年 5 月下旬、昼過ぎに津山市内の国道を乗用車で走行中、スーパーに面している歩道の植木にもたれかかるように座っている高齢の女性を見かけました。一旦は通り過ぎたものの何か様子がおかしいように感じたので引き返してみると今度は植木の横で仰臥位で寝ており、これはおかしいと思い、勇気を出して車から降りて反応を確認すると反

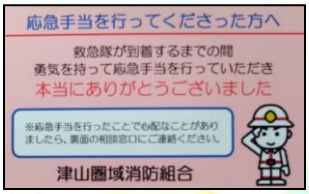
応も無く、呼吸もなし。直ちにハンズフリーにして 119 番通報しながら胸骨圧迫を開始しました。指令課員に状況を手短に伝え口頭指導を受けている最中に傷病者から「痛い！」と言う声が聞こえたので指令課員の指示で胸骨圧迫を中断し、救急車が到着するまで回復体位を維持しながら待っていてくれました。その後無事回復されたそうです。

高村さんの話では「胸骨圧迫を開始して声が聞こえるまでは１分あるかないかの時間でした。AED を広める会の活動をやっていたせいか落ち着いて行動できたのにビックリしました」とのこと。それでも非医療従事者が 1 歩踏み出す勇気はたいへんなこと、消防本部からも感謝状が贈られました。

【2 例目】

2021 年 10 月下旬、午後 8 時頃、70 歳代の男性が飲食店に来店後、急に息苦しい様子で倒れました。飲食店には津山市内のデイサービスに勤務している 50 歳代男性看護師さんと友人がいて、観察すると反応無く呼吸も感じられず。すぐに飲食店従業員に 119 番通報をお願いして友人と協力しながら胸骨圧迫を始めました。

救急隊が覚知から 9 分後に現場到着し１分後に傷病者と接触。接触時傷病者は店内床に倒れておりバイスタンダーが CPR 実施中でした。観察すると死戦期呼吸で総頸動脈触知不能。バイスタンダーの CPR が有効であったため胸骨圧迫を継続してもらいながら AED を装着、初期波形は心室細動で除細動実施。CPR を隊員に交代し２分後の確認では心拍再開！病院到着時には血圧、脈拍も回復し、その後意識も回復されたそうです。
日頃は救急の現場に携わる事がほとんどない看護師さん及び一般市民のファインプレーでした 。



いずれもバイスタンダーの勇気あるすばらしい活躍でした。津山圏域消防組合も津山中央病院に協力していただき、バイスタンダーに対してフォローアップとして相談窓口を開設しています。今回のバイスタンダーに対してもこのカードをお渡しして対応しております。

4. 事務局からのご案内

皆様、あけましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願いいたします。コロナ禍の状況が落ち着き皆様の日常が当たり前の日常に戻り、いつも通りの毎日が訪れますことを心よりお祈り申し上げます。また、コースが再開され、NPO の活動が開催されます際には、皆様の参加・ご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。

≪2022 年度『ミニ講演（Zoom）』第１回 近日開催予定！！≫

コロナ禍で活動や交流が乏しくなっているNPO 会員をつなぐ目的で、会員同士によるミニ講演を開催することになりました（毎月 金曜日午後 7 時から 30 分程度）。テーマは特定の分野に限定せず、ガイドライン 2020 の勉強会、心肺蘇生に関するトピックス、医療安全に関する話題、コロナウイルス感染の情報 、おかやまマラソンのこと、などなど幅広く企画し、会員の皆さんにも提案していただきたいと思っています 。メーリングリストで詳細をお知らせ致しますのでお見逃しなく！皆様のご参加をお待ちしております。

会費請求(ご案内)

Vol.35 で会費請求のご案内を同封いたしております。会費のお振込みがまだの方は、会員会費のお振込用紙をご利用の上、会費納入をよろしくお願い致します。
※お振込み先の振替口座は、銀行からの振込も可能です。
銀行振込を希望の方は、会員番号とお名前を記入の上お振込みをお願い致します。
【会員用郵便振替口座】口座番号：０１３１０－８－９５９４３
口座名義人：ＮＰＯ救命おかやま(ｴﾇﾋﾟｰｵｰｷｭｳﾒｲｵｶﾔﾏ)
【会員用銀行振込】　ゆうちょ銀行　一三九(ｲﾁｻﾝｷｭｳ) 店　当座　口座番号００９５９４３
※会費用銀行口座　口座名義人 特定非営利活動法人ＮＰＯ救命おかやま(ﾄｸﾃｲﾋｴｲﾘｶﾂﾄﾞｳﾎｳｼﾞﾝｴﾇﾋﾟｰｵｰ ｷｭｳﾒｲｵｶﾔﾏ)
☆寄付の口座は寄付専用となっておりますのでお間違え内容お願いいたします。

住所・勤務先の変更について

住所・勤務先、メールアドレス等の変更はお早めに随時事務局までメール・FAXにてご連絡ください。
※お振込み用紙記載の勤務先や連絡先住所･TEL等に変更がある場合は、変更記入の上、入金手続きをお願いします。

入会のご案内

NPO救命おかやまでは現在会員を募集いたしております。NPOの活動にご興味のある方のご紹介をお願いいたします。お申込みは、HPの入会の項目よりお申し込みフォームにてお申し込みください。
尚、HPにて申込入力後、またはコース開催時の入会申込用紙提出後、入金がまだの方は会員の手続きは未登録の状態ですので、早めの入金をお願いいたします。

寄付金募集のご案内

ＮＰＯ救命おかやまでは現在寄付を広く募集いたしております。NPO救命おかやまの活動をさらなる充実のため、心肺蘇生の輪を広げるこの活動にご賛同いただき寄付金のお申込みいただけます場合は、同封の赤色の振込用紙(寄付用)よりお申し込みをお願いいたします。
また、NPO救命おかやまの活動にご賛同いただける方が周りにいらっしゃいましたら何卒ご紹介の程よろしくお願いいたします。
尚、NPO救命おかやまは特定非営利活動法人ですので、寄附に伴う税制上の優遇措置はありません。
【寄付用郵便振替口座】口座番号：０１３００－９－１０４７８６
口座名義人：ＮＰＯ救命おかやま(ｴﾇﾋﾟｰｵｰｷｭｳﾒｲｵｶﾔﾏ)
【寄付用銀行振込口座】ゆうちょ銀行一三九(ｲﾁｻﾝｷｭｳ) 店当座口座番号０１０４７８６
口座名義人：特定非営利活動法人ＮＰＯ救命おかやま(ﾄｸﾃｲﾋｴｲﾘｶﾂﾄﾞｳﾎｳｼﾞﾝｴﾇﾋﾟｰｵｰｷｭｳﾒｲｵｶﾔﾏ)

【発行元】　特定非営利活動法人　ＮＰＯ救命おかやま 事務局

〒700-0914 岡山市北区鹿田町１－７－１０　E-mail：kyumeiok@md.okayama-u.ac.jp
電話＆FAX：０８６－226-3999　HP アドレス：http://npo-ok.umin.jp